



® 平成 29 年 9 月 15 日 (金)

No. 14530 1部370円(税込み)

発行所

一般財団法人 経済産業調査会

東京都中央区銀座2-8-9 (木挽館銀座ビル)

郵便番号 104-0061

[電話] 03-3535-3052

[FAX] 03-3567-4671

近畿本部 〒540-0012 大阪市中央区谷町1-7-4

(MF天満橋ビル8階) [電話] 06-6941-8971

経済産業調査会ポータルサイト <http://www.chosakai.or.jp/>

特許ニュースは

- 知的財産中心の法律、判決、行政および技術開発、技術予測等の専門情報紙です。

定期購読料 1カ年61,560円 6カ月32,400円
(税込み・配送料実費)

本紙内容の全部又は一部の無断複写・複製・転載及び
入力を禁じます(著作権法上の例外を除きます)。

目次

☆地域における観光と知的財産の関連性 (26) … (1)

地域における観光と知的財産の関連性 (26)

東京理科大学専門職大学院 (MIP)

教授 生越 由美

第5章 地域における事例

23. 山形県西村山郡河北町 (商標権、グッドデザイン賞)

近年、「スリッパの町」として知られるようになった山形県の河北町を取り上げる。この町は、山形県の中で唯一「町」を「ちょう」と読ませる地域として山形県内では知られている。地域産業の再生戦略の視点から検討する。

(1) 歴史¹

河北町は、鎌倉時代に「寒河江(さがえ)氏」がこの地の地頭となった頃から歴史が始まる。寒河江氏とは「大江氏²」の支流で、氏族の一つである。このため、鎌倉時代から室町時代初期までこの地は「寒河江荘(さがえのしょう)」と呼ばれた。大江氏の相続問題により、北寒河



創業1923年
杉村萬国特許法律事務所

SUGIMURA & Partners

代表弁理士 杉村 憲司 代表弁護士 杉村 光嗣

杉村 興作
河合 隆慶
中山 健一
坪内 伸
田中 達也
西尾 隆弘
朴 瑛哲
君塚 絵美
大島 かおり

塚中 哲雄
鈴木 治
村松 由布子
甲原 秀俊
高橋 林太郎
石川 雅章
真能 清志
阿部 拓郎
田中 睦美

澤田 達也
福尾 誠
寺嶋 勇太
太田 昌宏
福井 敏夫
永久保 宅哉
石井 裕充
井上 高雄
宮谷 昂佑

富田 和幸
齊藤 恭一
結城 仁美
吉澤 雄郎
酒匂 健吾
色部 暁義
藤本 一
辻 啓太
廣 昇

下地 健一
池田 浩
川原 敬祐
小松 靖之
柿沼 公二
田浦 弘達
鈴木 俊樹
塩川 未久
鈴木 裕貴

大倉 昭人
吉田 憲悟
岡野 大和
伊藤 怜愛
神 紘一郎
門田 尚也
内海 一成
橋本 大佑
Stephen Scott

栗野 晴夫
山口 雄輔
前田 勇人
片岡 憲一郎
坂本 晃太郎
加藤 正樹
市枝 信之
鈴木 麻菜美

所員178名うち弁理士63名、
欧州弁理士1名

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1 霞が関コモンゲート西館36階 E-mail: DPATENT@sugimura.partners
電話: 03-3581-2241(代表) FAX: 03-3580-0506 URL: <https://sugimura.partners/>

江荘は「最上領」となった。最上氏が守護・地頭の職を解かれた後は廃城となり、「天領」と「新庄藩領」に分割された。「新庄藩」は現「河北町北部」と「村山市」の西部を治めた。

江戸から明治、大正を経て、1954 (昭和29) 年からは、谷地町、西里村、溝延村、北谷地村を統合して「河北町 (かほくちょう)」となった。1955 (昭和30) 年、寒河江市から「元泉地区」を編入し、1963 (昭和38) 年、村山市より「寄込地区 (荒小屋地区)」を編入して、現在の河北町が誕生した。

(2) 地理

河北町は、山形県のはほぼ中央部にある人口約1万9千人の町である。内陸の地であるが、「最上川舟運」で経済的に非常に潤った地域である。特に、「紅花」を京都に運搬し、多大の富を得て栄えた。

図1：河北町



(3) 最上川舟運³

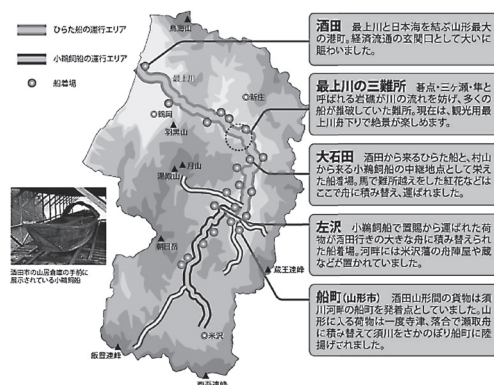
最上川には、「三難所」と呼ばれる場所がある (図2)。具体的には、「村山市の基点」、「三ヶ瀬」、「隼 (早房)」である。この3ヶ所で最上川は大きく蛇行し、流れも急になる。松尾芭蕉も『奥の細道』で「基点、隼、三ヶ瀬というおそろしき難所あり」と記したほどである。

この難所を最上義光が開削した。これが、舟運が発展する契機となった。また、中流部には舟運の基地となった新庄盆地の「清水」、山形盆地の「大石田」と「船町」の三河岸がある。

慶長年間に大掛かりな整備が行われ、江戸時代を通じて経済の発展に貢献した。

「大石田」は最上川の中流部にあり、山形盆地の入口である。このことから、舟運において重要な位置を占めていた。ここで荷物を積む船が多く、河口に位置する「酒田」と並んで繁栄を極めた。慶安年間には上り荷は「酒田船」、下り荷は「大石田船」に限るという「片運送」が始まり、幕末まで続いた。

図2：最上川的主要河岸・船着場⁴



江戸の経済が発展し、人口が多くなるにつれ、江戸での米不足が深刻な問題となった。そこで、最上川流域の幕府領で収穫された年貢米を江戸に運ぶこととなった。幕府の御用商人の「河村瑞賢」が派遣された。瑞賢は1672 (寛文12) 年に酒田を起点とした「西廻り航路」を確立し、このため「西の堺、東の酒田」と称され、酒田は隆盛を極めた。

元禄時代になると、河岸と船着場が発達した。酒田、清水 (大蔵村)、大石田、左沢 (大江町)、宮 (長井市) などがあるが、特に栄えたのは「酒田」と「大石田」である。松尾芭蕉が最上川を訪れた頃は、大石田が最も栄えていた。

輸送物資は当初は年貢米だったが、やがて

図3：最上川船運⁶

